

浄土

九月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（毎月一回）日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌第三五二号）
昭和四十三年八月二十五日 印刷
昭和四十三年九月一日 発行

第三十四卷

第九号



忍 び 合 う 世 界

さわやかな初秋のおとずれに、身がひきしまる。暑い夏から解放されて、秋風のすがすがしい肌ざわりに、季節の感触を味う。

人間の幸、不幸は紙単衣、といわれるが最近おこる様々の事故などをみても、樂しかるべきはずのレジャーが、一瞬にして奈落の底におちるような悲惨な結末になることも、しはしばである。だれでも、不幸をもとめるものではなく、幸せをもとめて生きつづけるのであるが、思い通りにならぬのが、娑婆世界である。娑婆とは、忍土ともいわれるが、お互に、忍びあわなければ生きられない世界であるということを実感することが大切である。

忍びあうということは、おもいやりの心が開けることである。

思いのままにならぬからといって、不満のみをぶつけ、不幸の原因をすべて、他事からのこととするような、あさましいわが心に、真実のすがた、生き方を、彼岸の行事はおしえてくれる。

精進すなといはれし親の彼岸かな

—目 次—

表紙「仲秋」松濤達文画

『彼岸』求めなければならない	
—或る友人夫婦の生活—	白幡 憲佑… (2)
会者定離	安居 香山… (6)
俳人 一茶の生涯①	大和 琴二… (10)
現代生活とお念仏	
—23回の終戦記念日におもうこと—	
	河原 信三… (14)
お歌をいただく	… (18)
維新のころの人たち③	大橋 俊雄… (20)
新刊紹介 「野の花」	… (23)
占いと念仏	川上 法俊… (24)
読者の声 ことばの功罪	
	吉川千佳子… (27)
和訳三部経 浄土の快樂と光明	
	村瀬 秀雄… (28)
後 記	… (32)

月がげのいたらぬさとはなけれども
ながむるひとのこころにぞすむ

法 然 上 人 御 歌





彼岸[〃] 求めなければならぬ

白幡憲佑

——或る夫人友婦の生活——

まったく想像もしなかったような出来事がつきからつきへ

と現出される世の中になったものだ。テレビに映しだされる
広告をみていると新製品の連続である。これほど物質が豊富
になって、日本人の大多数が「私は中産階級の生活です」と
答える社会には、もはや生きる悩みなどと、いう言葉は死語
になってしまったのかとさえ感じさせられる。ところが、家
庭裁判所・児童相談所は年を追うごとに扱う件数が増加して
きている現実、人間の悩みは機械でも解決はしてくれない。

物質と性格と愛情

友人のTが困惑した顔つきで訪れてきたと、家人に知らさ
れた時、「あーまたか」と私はある重大な出来事と、彼の顔
を一緒にして憂ウツになった。玄関口に立っている彼は、ソ

ロパンを片手に会社からぬけ出てきた姿である。

「今朝、Aの奥さんから電話があつて、Aの父親が脳溢血
でたおれて日赤病院にかつきこまれたらしいんだ。当分は
絶対安静で、奥さんも自宅へ帰れないので、子供を引きと
ってくれと、いつてきたんだよ」

と、Tはうつ向きかぎんでしゃべった。Tの子供達二人が
Aの所に厄介になっていることは数日前にふと耳にしたばか
りだった。一週間ほど前にTの妻が家を飛び出して以来のこ
となのだ。

彼女が家を飛び出した、と聞いても、私は「あーまたか」
と、さほど驚きも感じなかった。むしろ友人のTに対して、
やりきれないいらだたしさを感じただけだった。だが現実に

彼の顔をみてしまうと、「しようがない、それで子供達は病院に一緒にいるのか、すぐ連れて来いよ、今夜にでも考えよう」と、いわざるを得なかった。

「本当に申し訳ない、いまさら此処へこんな事を頼みには来られないんだが」と、いって彼は子供を連れに出ていった。

Tと私は古い友人である。彼の家庭問題については、既に三年半の時間をかけて話し合ってきたことなのだ。

彼等は五年程前に東京のある教会で結婚式をあげた。もともと私は結婚する前から彼等のことは知っていた。その頃から私には彼等の結婚が不安でならなかったのだ。

それはTが老父母に育てられた、ひとりっ子同様の環境にあったこと（彼には約二十五歳も年のへだたりのある兄がいたが、ヒリピン沖で戦死している）と、彼女も又、ひとりっ子として育てられていた。なにも、ひとりっ子同士の結婚だから危険性があるといったのではない。彼の場合は両親が比較的、年をとってからできた子供であり、学生時代に父親は亡くなったが、何事も母親が片付けてしまい、ただ可愛い可愛い育てられてきた人間であった。そこに自主性といったものが少年時代から、いささか欠けていたようだった。

彼女は派手な雰囲気をまき散らす女性であり、すらすらと

嘘をつく器用さが何よりも私の気にかかった。この事については結婚前から彼と話し合ったが、自主性のないと思われた彼も結婚相手については自分で選び出し、私の危懼を一笑にふする自信をみなぎらせていた。

二人が、はた目にも愉しくやっている、と思われたのは結婚して一年位ではなかったろうか。その頃は、一週間に一度は私の所へ二人で訪ねてきたり、やがて赤ん坊を抱いてきてみんなで夕飯を囲んだりしたものだ。そんな姿を見ていて、私は「この結婚はあぶないぞ」と、私なりに案じた不安感を苦笑のうちに否定せざるを得なかった。

ところがある時、彼の母親が（二年前に亡くなった）訪ねてきて「近頃は夫婦ゲンカが絶えないんです、と私は年寄りだから、なるべく口を出さないんですが」と、思いあまった口ぶりで語るのを聞いたが、年寄りらしい善意の思い過ごしだろうと、私は大して気にしなかったのだが、やがて訪れる回数も少なくなりだした。だが、それも家庭造りに落着いてきたのだろうと、安易に考えたりしていた反面、「若しかすると」と、いった不安感にもかられて、彼に電話をしてみた

「彼女の理想の生活様式があの家ではできないというんだよ、家の中を改造しろといってきたかいたんだ」と、彼は夫婦ゲンカの原因をきかせてくれた。彼の家は戦前に建てたもの

で、二階家で五つほどの室数があり、小さいながらも庭もついた家である。いまだき、三十半ばのサラリーマンが自分の持家があるだけでも幸せすぎるのに、勝手なことをいうもんだと思つたが、私はこの問題について彼の便宜をはかった。

その時も彼等夫婦に対して、テレビや婦人雑誌に出てくる生活様式や物質がそのまま現実のものになると考えては駄目だと、まことに幼稚な説法をして聞かせたりした。それでも流行のダイニングルームや自分達の居室ができあがってみると二人は結婚当初のように明るい雰囲気をまわりに与えていた。しかし、それも短い間だった。

今度はもっと決定的なでき事が私に知らされた。彼女の家出であつた。子供もつづいて二人うまれていた。二歳と三歳になる子供を置いての家出がしばしば続いた。「どうしてもお母さんと性格が合わないんです。この人は私の苦しい立場を少しもカバーしてくれずに、むしろお母さんの味方になるくらいなんです」と、訴えてきた。私にしてみれば、少年時代から知っているお姑さんである。いくら姑嫁の間柄になつても彼女の訴えるような性格の持ち主ではないと思えてしかなかった。そんなこんな騒ぎをくり返しているうちに老母は死んでいった。通夜の席で彼女は、さめざめと泣き弔問の客の同情をかっていた。家を飛び出すほど性格の異つた老



母でも、その死に対してみせる彼女の涙に私は、老母にはすまないが、これで彼等夫婦と二人の子供達の生活が軌道にのってくれば、むしろ老母への悲しいハナムケになってくれるだろうと考えたりもした。だが、彼女は駄目だった。一週間うちに居たと思うと、十日、二十日と蒸発してしまふようになった。老母の在世中は、それでも二人の孫をかかえて何んとか生活はできた。だが、いまとなつては会社へもTは行れなくなつてしまつた。

ある時、バーで働いていると聞いて深夜、私はTと共に彼女をさがしに出かけた。Tも既に離婚の決意を固めたと察して、私は彼女と逢つた。彼女の不満は「マイ・ホームにおいて自分の欲求が少しも満たされない。亭主は会社社会で帰りはおそい。私の夢はどうすればいいのです」と、その顔は奔放な若者の欲望そのものだった。

年の暮れに二人の子供を私は引きとり、Tの意向もあつて子供達を短期間だけでも施設へ頼むことにした。だが、Tはやはり自分だけでは生活をする知恵を持ち合せず、彼女も自堕落な生活の中で、経済的にゆきずまつてしまつた。Tや私

の友人達に寸借サギ的なこともしばしばやっていた。あと三日で正月を迎えようという夜、彼女は戻ってきた。無理に頼んで入れてもらった施設へ子供を引きとりに私は行った。

「今度こそ、しっかりやります」

の、二人の言葉を唯一の希望として、親子四人の新年を期待したものだ。彼女の病気は遂になおらず、再び三度と、私は彼等の子供の面倒をみる立場にたたされていた。今夏も一ヶ月、二人の子供は私の所で淋しい生活を送った。

求めたい彼岸を

人間の生活、それは何を意味しているのだろうか。豊かな物質を消費していくところに幸せが見出されてくるのか。核家族はマイ・ホームをうたい文句にしているが、そこには男性は家庭を無上のやすらぎ場所と心得え、女性は妻という就職口での欲望のトリコとなっている。お互いに築き上げる心はなく、自己主張のみで譲ることを知らない生活、これでは家庭も社会もなりたないことを知るべきなのだ。友人Tは妻をリードしていく知恵を持

ち合さず、依頼心だけで、

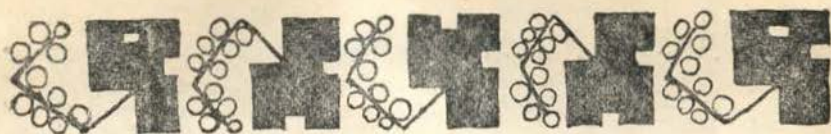
その日暮しをしようとする性格、これでは妻もやりきれないだろう。その妻がま



た、花よ蝶よと、夢物語の女主人公になりたい性格。この人を並べたとき、私は現代人のカリカチュアをみる思いがしてならない。

稚い精神構造に機械化された社会。人間の魂は何処へか置き去られてしまった。この岸は古代社会のバケモノ以上の人間の集まりになってしまいそうだ。人間はひとり、ヒツソリと自分のみつめる時間を失い過ぎていたのではないだろうか。グループ組織とあまりにも集積された力や意志を過大に評価しすぎる風潮がある。話し合う場は大衆の喧嘩の中にはあり得ない。集団の名のもとに自己の欲望を達成させようとする社会のあり方、これこそ無責任な自己主張である。こんな考えが家庭に流れているのがある意味のマイ・ホーム主義の悲劇となっていないだろうか。

こんなことを考えているとき、心臓移植に成功した札幌医大の和田教授の「これから先のことは判りません。私達は多くの努力を尽します。だが我々も人間であり患者も人間なのです」と、語った言葉が聞えてきた。どんなに機械文明が発達しても、我々は生身の人間なのである。心は機械では造り出せない。「生きる悩み」これは死語となっていない。ますます深く重いものになっている。そこに救われる世界、彼岸をひたぶるに求めたくなってくるのだ。



山 香 居 安

夏の一日、私は愛知県の明治村にいた。徳川夢声が村長だというこの村には、明治百年を記念して、明治の面影を残す建造物が数多く建てられていた。日本最初の京都のチンチン電車も、ここでは生き続けていた。生ずる者は、滅するのであるが、ここでは更正して、生き続けられるだけ生かされるのである。

私が此処を訪れたのは先輩の厚意によるものではあったが、又母校大正大学の更生の面影を此処に求めるためでもあった。時代の推運には勝てず、幾多の有為の人材を輩出した母校が校庭を去り、再び此処に再生する榮譽を与えられたその姿を求めてであった。しかし残念ながら、移築の事業は、未だ着手されていなかった。それでも、文明開花の明治を懐古しつつ、楽しい半日を此処で過した。

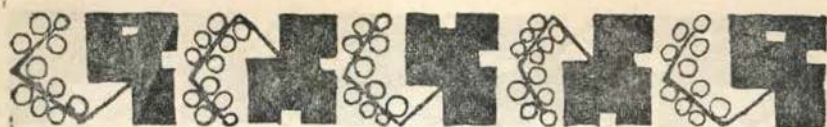
「東京から電話です」

その最中、私は思わぬ呼び出しで電話口に出た。そこには悲しいしらせが待っていた。私が、親ともしたい、敬愛していた萩原先生が今朝急逝されたというのが、それであった。一瞬、私の前に開けている明治村の天然色の景観は、空ろな黒白の映画のスクリーンのようになってしまった。そして、そのスクリーンをバックにして、先生の思い出が、走馬燈の様に走り続けた。

波をけやぶる ポートの驀進 風にささやく オールのひびき

永々に続くこのボートレースの歌は、先生の一つ覚えの歌であったが、酔が廻ってくると、必ず楽しそうに歌われた。鼻声も交えての単調な明治調のこの歌に、並みいる教え子達はヤンヤと喝采した。

「あの歌も、明治村にはふさわしいものなのだ」



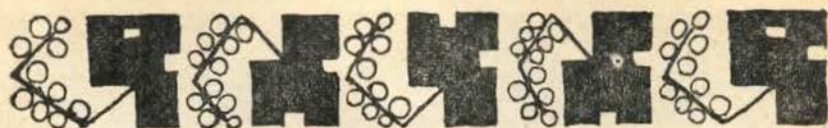
離 | 定 | 者 | 會

そんな感懐が、私の胸を突いた。

新幹線で急ぎ帰京する車中、私は今は亡き先生の事が去来するなかで、思いに耽った。
「私はどうしてこんなに親しい人々の死に目に会えないのだろうか」

私の師匠である林彦明大僧正にも、片岡麟角上人にも、その臨終の床にはべる事ができなかった。そして、終に父親の臨終にさえも会う事はできなかった。試に不幸という外ない。いろいろと理由はあるとしても、これは何としても人生の悲劇である。そして、今又先生の訃報に、他境で接するとは。

先生は、その一週間前から心臓の苦しみが続いていた。しかし、まさかそんなに早く世を去られるとは誰も考えていなかった。そう考えなかったのが、人間の浅はかさというものかも知れない。後で聞いた話によると、先生は已に死の近い事を悟っておられたらしい。そして、最小限必要なことは、夫人に指示されていたようである。我慢強い先生は、机上に仕事を続けながら、齒を食いしばって、一瞬の内にこの世を去られたのであった。臨終に会い得なかったのは私のみではなかった。その令嬢夫婦でさえ、間に合わなかった。試に人生は無常である。「会う者は必ず離れる」「生ずる者は必ず滅する」という事は、自然の哲理であり、釈尊が、法爾自然の道理として説かれたものである。その事は、確かにそうであり、充分知っている事であるが、やはり凡夫の私は、無常を感じて涙せざるを得ない。理窟なしに悲しいことである。しかし、この悲しみは、愚鈍といふべきものであろうか。信仰のいたらざるものといふべきであらうか。



私の母は八十四歳の齢で未だにシャンとしている。いくらか物忘れはひどくなってきたが、それでも朝早くから、家の仕事を手伝い、野良にも出掛けて行く。死ぬことを忘れた様でさえある。この頃は随分永生きをする様になってきたのであるが、それでも母の村では、もうそれ程、上の人はいない。母もその事は充分承知で、

「もうそろそろ私の番だね」

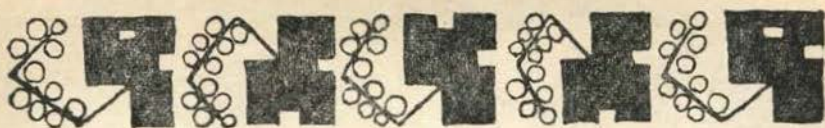
と何気なく言う。この言葉は、子供にとっては、試につらい言葉である。しかし、これも間違いない自然の道理であり、ここまでくると、後は確かに時間の問題である。老少不定とはいふものの、八十の坂を越した人に、多くを望む事は、無理というものである。しかし、全く母は、何気なく、この事をいうのである。そして、母が何気なくこれを言い得るのは、実は念仏の功德なのである。

父もそうであったが、母は試に真剣な念仏信者であり、念仏と一枚になった生活をしてゐる妙好人の一人なのである。この母が、

「次は私の番だ」

ということとは、次に死ぬ番だという事でなく、阿弥陀如来の膝もとに行ける番だという実感をこめた言葉なのである。死を待つ諦めの言葉でなく、極楽に生れる喜びの言葉なのである。それは、私などの近よることのできない深い悟りの境地なのである。そして、今ここにこうして生かされている一日を喜び感謝しつつ、精一杯毎日働いているのである。

東海道を下る度に、私は美しい滋賀の故郷を訪ねることにしている。そこには又、元氣な母が待っている。せめてもの孝行をこんな形でしている私も、この母の信仰生活にはとても勝てない。私の滞在は殆んど一夜である。夜遅く着いて、朝には去って行く。



「たまには二晩もとまったら」

必ず母はそう言つて歎くのであるが、忙しい私には一夜が精一杯である。そんな愚痴を言いながらも、結構嬉しいらしく、夜のふけるのも忘れて語るのが常である。この母が、必ず別れるときに、

「ここで別れるのが最後だと思っている。又会えれば、仏様のおかげだ」と言つて何のこだわりもなく別れてしまふ。

「生者必滅、会者定離」ということを諦観しての言葉なのである。息子に会えば会えたで喜ぶのであるが、これを最後として、再び会うことなく、この世を去つても、何の心残りもないということが、この母の言葉なのである。私はいつも、この母の言葉に心打たれる。そしてまた、私はやはりこの母の死に目にも、会えぬかも知れないと、フトそんな心悲しい思いが走る。悟り切つた母と、凡夫の私とは、離別もまたこれ程に違ふのである。

会者定離。まことにたわいもないこの分り切つた哲理が、いつまでも人生の大きな課題であるところに、人生のよさもあるというものであろうが、これを本当に私のものとして解決し、体認することは、なかなか難しいものである。



人 俳

一茶の生涯

(一)

大 和 琴 二

一 わが里はどう霞んでもいひつなり

一茶は、信州の生んだ俳人である。千曲川にそって、善光寺平をつきぬけた列車は、また平野をすてて、山へ山へと入ってゆく。山へたてかけたような、いくばくの耕地、溪谷に点在する村落をみると、そこには、一茶と同じ苦しみや葛藤が、ながい年月のあいだ、ひそんでいたことをしのばれる。信越国境かい柏原駅でおきる。

すぐ目の前には、妙高がたちはだかり、そこから西へつづいて、黒姫、飯綱、戸隠がそびえている。妙高の裾が、なだらかに北へおちてゆくところは、もう越後(新潟)である。

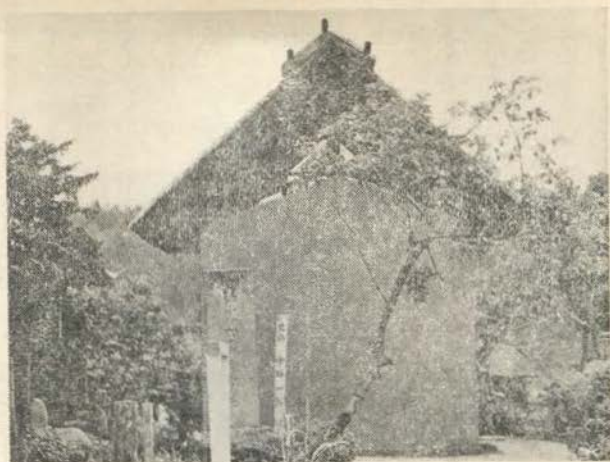
駅から、二、三百米ゆくと、道の右側に、なだらかな小丘が見出され、これを小丸山という。この丘の裏手に、一茶が永遠にねむる墓がある。丘をのぼりつめたところに、「俳諧

寺」と刻んだ、扁額を掲げた一茶の位牌堂がある。

一茶の墓の表には、南無阿弥陀仏と刻まれ、かたわらに「法名道澄、先祖善右衛門、延宝九酉年八月六日」と小さくきざまれている。

また、側面には、「原主小林弥五右衛門」「明和八辛卯年十月十七日建立」と誌されている。この原主小林弥五右衛門とあるのは、一茶の祖父弥兵衛の兄で、善右衛門の長男である。柏原における小林一族の系譜にあまり明瞭ではないが、文禄元年小林太郎右衛門が、上水内郡芋井(現在長野市)から移住したのが、その祖先らしく、善右衛門は、それから、五代位を経過している。

一茶も、一茶の祖先も、かれを愛撫した祖母も、父母も、また生涯憎しみつづけた継母や異母弟も、いまは恩讐をはなれて、その一基の墓に合葬されているのである。



＜一茶終焉の土蔵＞

小丸山を下り、ふたび本通りにて、東へ百米ほどゆくと、いわゆる北国街道である柏原は、北国街道にそって、南北にかなりの街なみをつくっている
文政十年に焼けたといわれる一茶の旧居は、現在の小林家の南隣にあたっており、一茶終焉の土蔵は、その裏畑の中に立っている。間口三間、奥行二間半、黒みをおびた砂壁が、ぼろぼろにくずれ、勾配の急な藁屋根が、空へくい入るように尖っている。

一茶が生まれた宝暦十三年（一七六三）は、徳川十代将軍家治のときである。ちょうど、芭蕉が亡くなってから七十年、蕪村が生まれてから四十年たった時代である。一茶はこの年の五月五日に生まれている。

一茶の父は小林弥五兵衛、このとき三十一歳、その家庭には、母へに女のほかに当年五十二歳の祖母かな女があった。のちに継母にかくれて、一茶を愛育したのは、この祖母かな女である。一茶の名は信之、通称を弥太郎といった。

一茶三歳のとき、母くに女が亡くなり、それからの一茶は、祖母の手一つに育てられることになった。このとき祖母は五十歳であった。祖母の恩愛のなかにすぐと大きくなったのであるが、もの心づくにしたがって、片親をもたない少年には、なにか充たされない心の空虚さがあった。

「親のない子はどこでも知れる。爪をくわえて門に立つと、子どもらに唄はるるも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に踞りて長の日をくらしぬ、我身ながらも哀也けり。

われときて遊べや親のない雀

六才 弥太郎

一茶は、のちに「おらが春」の中で、このように述懐している。

母のくに女が亡くなったとき、父弥五兵衛はまだ男盛りであつたが、一子弥太郎の成長をたのしみながら、独身で通してきた。しかし祖母のかな女もようやく老令になり、家庭の事情も女手なしにはやってゆかれなくなった。

一茶八歳のときに、さつ女を後妻として迎えた。このとき、父弥五兵衛は三十八歳、さつ女は二十七歳であつた。

日がたつにしたがつて、継母はしだいに一茶を冷酷にあつた。柏原の本陣中村六右衛門は、名を利為といい、新甫と号した。学を好み、書をよくし、俳諧の道にも堪能であつたかれは、少年弥太郎の天分を愛し、閑をみては、文字をおしえ、学問を教えた。

しかし、継母は、百姓の子に学問はいらぬとして、本陣への出入をさしとめた。そして、田畑へ出され、馬曳くことも大人並みにさせられ、夜は夜で藁を打ち、草鞋作りをさせられた。

ままつ子や涼み仕事に藁叩く

この句は、当時の気持ちをやんだものであろう。「父の終焉日記」には、こんな風にのべられている。

「春去り来れば、畑農作の助けとなりて、昼は終日菜摘、草刈り、馬の口とりて、夜は夜すがら窓の下の月の明りに

杓打、草鞋作りて文まなぶいとまもなかりけり。

明和九年五月十日、後の母、男子仙六を生めり。此時、信之（一茶）は九歳になんりけり。いたましいかな、此日より信之、弟仙六の抱守りに、春の暮遅きもばこ（大便）に涎に衣紋り、秋の暮はやきもばり（小便）に肌の乾くときなかりき。仙六むつかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母に疑はれ、杖のうき目をあてらるること、日に百度、目の腫れざる日なかりい」

継母の阿修羅のような怒叱責のな罵かにも、祖母の愛情一つにすがつて一茶は生れてきた。しかし、その祖母も、安永六年八月十四日、六十六歳を一期として、この世を去つた。最愛の一茶をのこして死んでいった祖母の心もうかがわれるが、頼む木陰もなくなった一茶の悲歎はいかばかりであつたらうか。

十四歳の少年一茶は、このように人生の荒野へほうり出されたのである。

三

祖母なきあとの継母の虐待は、日ましに募るばかりであつた。小心の一茶は、ただおどおどとして、いまは風の音にさえ、おびえるような日を送っていた。こうした継母と継子と



△小丸山公園と一茶句碑△

の切迫した空気の中であって、父の弥五兵衛は、心弱い、むしろ愚直にちか性格の持ち主であった。「すべては過去の業因である。人爲をもってはどうすることもできない」というように、人生を消極的に眺める側の人であった。

したがって、進んで一家の風波を解決しようとはせず、ただ、人知れず心を痛める日が続くのみであった。しかし、とどのつまところを知らない継母の怒号と叱責に、さすが心弱い父も、このままにしておけば家庭は破滅である。しばら

く一茶を家庭から遠ざけることの必要さに気づき、お互が離れて生活していたならば、いつかは心が解けて、相慕うときもあろうという心づかいから、十五歳の春、少年一茶を、遠く江戸へ奉公に旅立たせることにしたのである。

「十五歳の春の暁、しほしほ家を出けし時、父は牟礼の駅まで送りました。『毒なる物はたべなよ、人にあしざまに思はれなよ、とみに帰って健かな顔を再び我に見せよ』とていとねもごろな言の葉に、思はず泪浮みしが、未練の心ばし起りなば、連なる人に笑はれん、父に弱きを見せじと、無理に勇みて別れけり」

(父の終焉日記)

情けをこめた父の言葉は、一茶の身に側々とせまり、思わず臉をあつくしたのであるが、気の弱い父をこのうえ悲しませたくないと思った一茶は、熱涙を吞んで、江戸へ足を踏み出したのである。

(つづく)

— 取次書籍 —

故真野正順 著

「無量寿経講話」

B 6 版四一〇頁

定価 五三〇円 送料 七〇円

本会にてお取次ぎいたします



現代生活とお念仏

— 二十三回の終戦記念日におもうちこと —

河原 信三

『八月十五日は、どういう日か知っていますか』

『誰れかの誕生日かな』

『ほかに、日本にとって八月十五日は、なにか思いあたりませんか』

『原子爆弾が落とされた日だと思えます』

『わかりません』

真夏の太陽が、さんさんとふりそそぐ、海浜のビーチパラソルのなかで、たのしげに語りあっている若い人から、かえされた言葉であります。

『第二次世界大戦を知っていますか。どことどこの国が戦ったのでしょうか』

「ソ連とアメリカ」「中国とアメリカ」

「日本とソ連」「日本とアメリカ」

「ベトナムじゃないの」

潮騒の音にまじって、にぎやかな会話がくりかえされていきました。

これは、終戦記念日の特集として放送されたテレビのひとことです。

おもえば、戦後二十三年の歳月がながれたのでありますが、すでに、戦後という言葉のもつ響きには、違和感さえ感じられるほどに、わが国の発展はめざましいものがあります。平和を基調として政治、経済、社会、文化の進展も、順調のように感じられます。

現在、世界を見廻してみても、南北ベトナムの問題、中近東諸国、インド・パキスタン等戦火につつまれたり、一触即発の危険のなかにある国々がたくさんありますなかで、いろいろの問題はかかえているとしても、すくなくとも、わが国に、平和のなかに自由が守られていることは事実です。

身のまわりをかんがえてみても、機械文明の恩恵を蒙って、日常の生活は便利になり、豊かさを増し、物質文化をお歌しているのが現状ではないでしょうか。

このことは、戦争を体験し、戦後の荒廃したなかで生きぬいてきた人たちには、現在の平和のなかに自由を獲得しながら、のびのびと生きられる生活が、ありがたく、尊く感じとられるのであります。

しかし、そのことは、戦時中の物質的な困窮や、危険と不安のなかに生命をさらしてきた人びとが、現在の生活と比較した場合におこる、いわば価値観の比較において味われる感慨であって、かならずしも、現代において、そのような、うけとり方がなされているではありませんか。

むしろ、日常の生活における、うけとり方は、「あたりまえ」としてうけとられているのが現実のような気がいたします。

と申しますのは、人間には、ものごとに慣れるという習性があります。たとえば、わたしは以前に、地震で有名になった、信州の松代を訪ねたことがあります。地震がおこった当初は、人びとは緊張しすこしの揺れ動きに対しても、安全のための処置を怠りなくしたのですが、度重なるうちに、地元の人びとは、その揺れかたに馴れてしまい、少々揺れにはおどろかず、「いまのは震度五だよ」というようなうけとり方をしていました。

慣れるということは、一面おそろしいことだと思えます。慣れるために、心にすぎができてしまい、大事故のもとになることが、しばしばあるからです。

さきほどの平和についても、平和ということに慣れてしまい、日常の生活がまもられることがあたりまえとして、うけとられるとしたならば、そこには、なんの喜びも、感激も味うことができないわけです。

喜びも感激も味うことができない、ということとは、逆にいえば、そこに生ずるものは、不満と不平ということになります。

現代は、そのような傾向があるのではないのでしょうか。



戦争のおもいでは、いまわしいものが多いが、現在の平和な生活を考える場合に、ただそのことだけに終始するのではなくて、平和を獲得するために払われた、限らない犠牲におもいを到さなければならぬと思います。

わが国が、第二次大戦終結において、永久の平和宣言をするまでに払われた、戦争犠牲の数は三百四十余万人ともいわれます。

かかえりみれば、平和の礎となられたこれらの犠牲者たちも、好き好んで戦争に出かけたわけではありません。かれら

にも、人間として、人の子の親として、仕事に対する情熱もあれば、家族に対する愛情もあったはずであります。にもかかわらず、すべての仕事をなげだし、あたたかい家庭をもかなぐりすてて戦場の露と消えていったのです。

かれたちの心のかたすみには、戦争に対するイデオロギーをこえて、だれしも平和への祈りがこめられていたにちがひありません。

戦争中には、こんな体験をされた方は多いと思います。それは、たとえば一家中心の働き手である父親が出征した場合に、あとに残された女、子供や年寄りたちが、なんとかしてその家庭を守ってゆかなければならない。「父親が帰ってくるまでは、お互に欲しいものも我慢しあって頑張ろうね」とはげましの言葉をかわしながら、生きられた経験です。

そのときには、一つのことを三人で分ち合って養ふ、欲しいものも我慢して、ゆずりあって求めたものであります。

体験のない現代の若い人びとから言わせると、なんとみじめな、さみしい時代だったのだらうと、むしろ憐望されるかもしれません。

しかし、家庭的にも恵まれず、物資も不足していた時代にお互が我慢して生きた体験から、かちえたものは、ただ単に

我慢し、しのびあい、仕方がないからあきらめる的なものではなく、もっと大切な、おもしろい心の心が養われたということとです。

「欲しければ、一つづつ三個求めたらよいではないか」という現代的な考え方では理解されにくいかもしれません、一つのものか三つに分け合うという、その心の奥には、人びとに対する、あたたかいおもしろいやりをよせるという積極的なうごきが、働くことになるのであります。

わたしたちの現代の生活は、物質的に豊かさを増し、平和のなかに、はなやかな繁栄ある社会をきこうという方向とは裏腹に、お互に人間同志が、心を通いあわすこともできず、いらいらしながら、欲求不満の行動が爆発し合っている事実も、また見逃すことはできません。

昭和元録といわれる時代に、心と心が通いあい、もののありがたさ、尊さを感じとることによって、ほんとうのよろこびをかみしめるためには、一体どうすればよいのでありましようか。

人の喜びが自分の喜びとなり、人の悲しみが、わたし自身の悲しみとしてうけとることのできるためには、まず心と心が通いあわなければなりません。

そのもととなるものは、信ずる心から生ずるものだとおもいます。信ずる心は、お念仏によって育まれるものです。「現代を生きる心がまえは、どのようにもたらよいでしょう」という質問に対して、法然上人は、つぎのようにお答えになっておられます。

「現代において、ほんとうの生き方をもとめる人は、まずお念仏を唱えられるような生活環境をもって過すことが、一番大切です。

お念仏を中心にして、生活をなささい」と。

なぜかという、お念仏することによって、もののまことのすがたが自然にわかってくると仰言るのです。

いままで、人生あたりまえとうけとり、不平と不満と不信のなかにあえていたものが、お念仏によって、人生のありがたさ、尊さが味わわれ、人の心がわり、毎日の生活が、よろこびのなかに生かされていく、ということを実証されたのが、法然上人であられます。

現代こそ、お念仏することの必要性をつよく感ずるのであります。

す。そこでこの光明を清浄光といいます。

またみ仏の光明に浴するならば、その人は怒り狂うことがなくなります。人々は激しく怒り、心が転倒するところからいろいろの悪を発生させます。しかしみ仏の光明が怒りを滅して下さるので、よく耐え忍ぶ人と同じ喜びにしたることができます。そこでこの光明を歡喜光といいます。

またみ仏の光明に浴するならば、その人の愚かさを取除いて下さいます。人々は愚かさ、愚かさの争いの中にあつて暮しています。ここにもいろいろの悪が発生します。しかしみ仏の光明が愚痴を滅して下さるので、智者と同じく明るい生活を送ることができます。

そこでこの光明を智慧光といいます。

その他み仏の光明はくらべものがない程に勝れているので無對光、ほのほの如くに熾んであるので焰王光、たえることがないので不斷光、思い難いので難思光、称えられないので無称光、日や月を超えたものなので超日月光といひます。

x

經典に「攝取する」とあることについて、

古人は「掌の内に握つて捨てざるを攝取と名く」と説いていますが、常にみ仏によつて救われ護られているということです。そこで阿彌陀さまの光明は無量無辺であるけれども、お念仏を唱えるものだけが、み仏の光明に浴することができるのであります。このことが經典の句の意味であり、お歌の意味するところであります。

それならみ仏の光明が宇宙に遍満しているのに、何故に念仏行者だけがみ仏の光明に浴するのかといへば、お念仏を唱えることによつて、衆生とみ仏とが人格的に一体となるからであります。法然上人は

「善導の、三縁の中の親縁を釈し給に、衆生ほとけを礼すれば、仏これを見たまふ。衆生ほとけをとなふれば、仏これをきき給ふ。衆生仏を念すれば、仏も衆生を念じたまふ。かるがゆへに阿彌陀仏の三業と、行者の三業とこれこれひとつになりて、仏も衆生も、おや子のごとくなるゆへに、親縁となつくと候ぬれば、御手にせずをもたせたまひて候はば、仏これを御らん候べし。御心に念仏申すぞかしと思し候はば、仏も行者を念じ給へし」

とお示しになっています。そして更に一歩を進めて、念仏行者だけが光明に浴するわけについて、法然上人は

「本願の義、いわく余行は本願にあらず。故にこれを照摂せず。念仏はこれ本願なり。故にこれを照摂す」と説かれています。また、「彼の仏の心光常にこの人を照して、摂護して捨てたまわす」

と、心光という語を用いています。普通に目に見える光り（色光）ではなく、「仏心とは大慈悲これなり」とある言葉からして、み仏の心、み仏の大慈悲が光りとなって現われたいものであるから心光というのであります。即ち「念仏の衆生を攝取して捨てたまわす」という光明も、「ながむる人の心にぞすむ」という光明も、この心光であります。

要するにこのお歌は

皎々と照す月光も、これを仰ぎみなければ見えないように、み仏の光明がいかに無量無辺であつても、お念仏を唱えなければ、その大慈悲に浴することができない。

という意味であります。これこそ法然上人ので信仰の真髓でありましょう。



(微定上人肖像) 京都福寿院蔵

新維のころの人たち

— その三 —

大橋 俊雄

アメリカにつづいて、フランス・イギリスと通商条約を結ぶようになると、江戸期を通じて邪教として禁止されていたはずのキリスト教は、半ば公然と、宣教師の手によって入ってきた。来日した宣教師は、日本語を習得するかたわら、日曜日には礼拝をおこない、列席する日本人には聖書をあたえて、信仰への導びきとしたが、寺院のなかには神奈川の成仏寺や長崎大徳寺のように、宣教師に宿舎を提供したものもあり、節操のなさをなげいていた人もいた。それにしても、キリスト教が入ってくれば、当然仏教とキリスト教との間に衝突のおこるのは、火をみるよりも明らかであり、仏教は自己保存のために、キリスト教をたたき、それによって自己の価値を認めさせなければならぬ。こうした世相を背景に、九州男子の烈々たる気魄を心に秘めて、対キリスト教政策のために立ちあがったのは、鶴飼微定であった。微定といえば、私たちは知恩院に所蔵する多くの文化財を蒐集した高僧としての一面を知悉しているのはいうものの、対キリスト教宣布のために、どのような態度をしめして戦ったか、また知恩院を民衆の寺とするため、朝まいりおあさじをはじめ、参詣人に晨朝布教をしたことについては、案外知る人も少ない。ロンドン伝道協

(徹定上人自賛画)



会の中国特派員ジョセフ・エドキンスによって「釈教正謬」がホシコンで出版されたのは、一八六六年のことであって、本書には仏教がいかに上帝の教えにそむき誤謬をおかしているかを記しているが、この書に出版後間もなく、他の書物とともに輸入されたらしい。「僧侶が読んだとき、内容的にとるにたらないものであっても、仏教の何たるかを知らぬ人たちにとっては、それを真実と受けとるにちがいない。とすれば由々しき問題であり、これをこのままに放置することはではない」と考えた徹定は、出版の翌々年すなわち一八六八年(明治元)年三月「釈教正謬初破」を上梓し、つ

づいて「釈教正謬再破」「笑耶論」「耶蘇興廃年表」をあらわして、その非を破し、仏教の正しい所以を説述している。また此の年の二月、王政復古の大会が発せられるや、江戸幕府の罪を太政官に謝するように命ぜられて西上したが、時に彼は請われて、京阪の寺院僧侶に「闢邪集」を講じ、後増上寺でも「釈教正謬初破」を講義したという。これというのも、一つにキリスト教の輸入にともない、あくまで仏教を擁護しようとする護法運動のあらわれであったが、大和の古寺をおとずれ、放置されていた古写経類の蒐集を試みたのも、また護法のあらわれであったといえよう。奈良の念仏寺は袋中良定の中興した寺であったけれども、まともに住職さえいない。せっかく袋中が秋篠寺・金峰山寺その他の古寺から購い求めた写経も、そして経蔵ですらくずれおちようとしている。「もったいない、このまま朽ちさせるのは、しのびない」ということで、大金を投じて買い求めが、購い求めたものはここに収められている。すべての經典ではなかった。彼の求めたのは目に映じた中国の古写経や天平写経のみであったが、彼が求めておいて下されたならばこそ、後代に光りを放ち残すことができたのだ。勿論、こうして古写経を各地に求めているうちに、

鑑識眼にたけていったであらうことはいうまでもない。そのため、知恩院の財政を破綻に瀕せしめるまでに至らしめ、三十数万円の借財をのこしたとまで言われているが、その金は知恩院の財産からの支出ではなく、実は師禪竜と西岸寺から出たものであったという。というのは、徹定が知恩院に晋董してから購求したものは殆んどないことからしても、知ることができよう。数十万円といえ、今のお金に換算して数十億円にもなろうか。いいかえれば、借財は徹定ののこしたものでなかったのである。それならば、どうして借財ができたかといえ、明治維新のとき、明治天皇御東幸の用金として知恩院に課せられた五万両の上納献金は、住持学天の手をへて、すぐさま献じられたとはいふものの、多くは借入金であったらしい。返金されたものがあつたとしても、残金と利子もろともにふえた分が、つもりつもって三十三万余円になったのではあるまいか。

ともあれ、徹定は新宗制の制定をめぐり、これを発布しようとする日野靈瑞を主班とする関東浄土宗の攻勢と、知恩院寺務規則改正をめざす山城国改正党有志教学会らによ

る内部分裂、更には山費不納同盟が結成されたことによつて、明治七年六月住してより以来、十四年間住みなれた知恩院を、同二十年四月追われるようにして下山した。その後は、九州・四国・東海の地を、席のあたたまるとでないほど、多忙な日々を掛錫のためにおくついていたが、同二十四年三月十五日名古屋の阿弥陀堂で、僅か一両名の從僧に見とられ、七十八歳で浄土に旅立たれた。

徹定のあとをついで、知恩院門主となつたのは福田行誠であつたが、在山僅か一か年にしてしりぞいたため、その後を日野靈瑞がおそつた。彼は二十四年「総本山知恩院整理債券」を発行するとともに、七旬の老軀をひっさげて、祖山復興のために親化し、信徒に結縁し、浄財をあつめるのに苦心されたという。

— ○ — ○ —

— ○ — ○ —

兵庫浄土宗青年連合会

野の花

—信仰のしるべ—



「野の花」という本の題名について「このなかに収められている一つ一つの問いが、野辺に何気なく咲いている野の花に譬えられるからです。どんなにささやかな野の花であつても、それはそれなりに一生懸命に咲いているのです。そして、それはそれなりにこの世に存在する意味をもっているのです。」と、あとがきに述べられている。

仏教は、わが国に伝えられてからの長い歴史の流れのなかで、民族の生活のおく底にまで定着している。あまりにも生活化され、習慣化されてしまったために、仏教のもつ本来の意味が失われている場合が多い。

お盆や、お彼岸や、お十夜などの一般化している年中行事にしてもまたは日常につとめている仏事法事における威儀作法にしても、

お灯りをともし、一片の焼香ひとつをするにしてもそれぞれ尊い意味あいがあるはずである。

それら身近かたころがつっている、素朴ともおもわれるような疑問が、一般の人びとには正しく理解されていない場合が多いのである。この本は、

問 宗教ということばの意味を教えてください。

問 阿彌陀仏があつた世に実在するというのであれば、その証拠を示してください。

問 極楽や地獄はあつた世にあるのですか、それともこの世のわたくしたちの心のなかにあるのですか。

問 浄土宗の教えでは、何よりもまず口でなむあみだぶつを称えるようにいわれま

すが、これにはどうも抵抗や反発を感じますが。

問 先祖の靈魂はあるのですか、

問 焼香する意味とその正しい仕方を教えてください。

など、問題を提起して、現代人の問題意識のなかで親切に答えてくれている。

本書は、一、信仰篇、二、生活篇の二篇より成り、夫々具体的な質問形式がとられ、一信仰篇二十二問、二、生活篇三十五問、その中には、年中行事の解説もなされている。

付録として、「浄土宗のはじまり」「法然上人の生涯(年譜)」が綴りこまれている。

なお、執筆者は、三枝樹隆善、佐藤心岳、沢田謙照、高橋弘次の各氏であり、諸氏はみな現在、仏教大学の助教授又は講師であつて新進中堅の学人である。

現代人に浄土宗のおしえを伝える恰好の著書である。

発行所 兵庫浄土宗青年連合会

兵庫県尼ヶ崎市寺町六甘露寺内

非売品 新書版 百七十頁

占いと念仏(三)

川上法俊

今、結婚相手の女性を占ったとして、天風姤の卦が出たとします。これは一女一人に一男五人以上の姿(一は陽一は陰)で、このような女性は正規の妻には避くべきでしょう。しかし、今この女性が水商売でもやるために占って、この卦を得ればパトロン多々的で繁盛となります。

天雷无妄の卦の如きは、既に陰徳充分の人は報われる卦で安全ですが、小人がこの卦を得れば思いがけぬ狐福となり、後に災いが待ちかけます。

山地剝の如きは小人全盛の卦で君子には全くの凶ですが、小人には一時的にもせよ吉卦となります。



さて、次に周易の特徴はその変化性にあります。易にカワルの訓を考えて下さい。大自然は無限の変転で固定しません。そのために現在過去未来の三者を示し、殊に未来を示す

ために、それが単純なる宿命的なるものでなく、その人の平常の徳努力等により変化の事が示されます。ここが寺社の籤札の答と少し異なるところですが、同時に、これらの種々の解釈法が熟練未熟練としての占者の価値を左右します。第一にいかん哲学的であるからといっても、一面、感応道交して卦を得た上の解釈ですから、熟練した平静さが占者に要求されます。古来、儒者が四徳中第一義をのみ立てがちであったのは、この巫術的危険が嫌いであつたのでしょう。左伝には種々な占例がありますが、晋文公の帰国の可否占いなど好例です。亡命中帰国すべきや否やを占して、水雷屯および雷地予を得て、すべて不可とした時、一臣のクーデターに可との解釈に従い帰国して成功しています。坎為水の如きはおもしろい卦です。水が六に流れ込み出られぬ形で小人には全く凶ですが、君子にはやがて本望を終ぐの吉卦です。君子は窮境

にも本節を棄てず、そのため水の盈つれば再び流れ出す如く、その止らざる一貫の節操あるためとします。無論、天運をも論ずるのですから君子の凶卦も多く、天山遯は所謂、明哲保身の卦、地水明夷は更に踏晦の卦ですが、このような時に受ける諸宗派的感覚もおもしろいものです。何故なら純粹にその宗派に属せば当然、その宗派の性格と同じくなる筈だからです。

同じく君子大凶の卦爻ですが、山地剝の上九爻はお念仏、沢風大過の上六爻は臨済千尺井底の則の様にも見えます。

(易は逆数で下から初一二三四五上と教え、一は陽で九で表わし、一は陰で六で表わします) 前者は悪人榮えるの時に遭い、何と努力するも駄目、それでも多少の残れる善人と共に虚位を擁いて念仏する貴人の相、後者は不成功をも承知の上、後世の惰夫を立たしめんとして身を殺して仁をなす底の形です。故に後者の爻辞(爻の説明句)は

過涉之凶不可咎也

とあり、前者の爻辞は、

碩果不食 君子得輿 小人剥廬 君子得輿民

所載也 小人剥廬終不可用也 (辞は大方員を

ふみ詩の様な形で書れています)

とあります。前の句はなすべきの正義をなしたおるは凶

と雖も、人倫上咎められぬではないかの同情句であり、後者は鳥に食い荒された樹上の梢の天辺に未だ、ただ一つの大きな果が食い残され、夕陽に照らされ明日の一陽來復を待つイメージで、陰やがて極つて小人は君子全滅は必ず小人自身の滅ともなる故に小人の墓穴を掘る態を見れます。仲々おもしろい対比でしょう。またよく大吉反りて凶等の事は易では尚更です。乾は易の代表卦で、よく乾元亨利貞ケンゲンコウリケンゲンコウリなど呪文のように唱えられるのも、この卦の文ですが、この卦の如きは凡夫にはかえって過とされ、殊に女子にはよろこばれず婚姻等には凶卦とされます。坤もまた行過ぎれば竜戰千野其血玄黄というようなことになりました。め、男女共あまりよろこびません。積善之余慶積不善之余殃、の有名な句はこの卦の文言という十翼一書中の句です。



一見同じような浄土宗と一向宗の念仏が、門徒の念仏は一見受容的な排他、浄土宗の念仏は一見夾量で、かえって寛容なことは、少しオーストドックスに学んだ人なら両者とも充分に知らねばなりません。門徒では宇宙万物が阿弥陀のはからいという観念で、大変キリスト教に似た仏様で、勢い弥陀一仏念仏一行以外は一切邪仏邪神というような観念となり、旧教に反対して立教したカルビン派の長老神政政治が逆に焚殺

刑を用いたと似たことになります。無論一応は機縁問題について他に強める事は禁止していますが、時々乱れます。

蓮如の諸神諸仏軽んずべからず、王法為本の句も、その句だけ読むから間違うのです。蓮如は御文章の中ではっきり説明しています。諸神諸仏もみな弥陀一仏の分身としての顕現故に軽んじてはならず、さりとて弥陀一仏に帰依する者には、特に尊敬の必要はないとしますのです。それだからこそ熱心な門徒の家程、仏壇は立派にして神棚はなく、通常、寺院には必らずある鎮守神又は守護天も門徒寺院にはないのが普通です。

とにかく釈迦も薬師も弥勒も大日もすべて弥陀仏の家来だというような主張では究極面、何としても日蓮宗とばかりではなく、真言天台禪淨すべての宗と争いを生じ、門徒一撥の様なことも仕方ないでしょう。

その点、浄土宗はまるで違ふのです。すべて通常どうり一般の仏教を認めた上にただ我等凡夫は非力悪業深重の凡夫故に、凡夫救済の弥陀一仏にすがらうというわけです。ですから廻向発願心も門徒の感情的な行過ぎと異なり、非力ながら父子相迎で、父からの迎えばかりではなく我からもすべての善根を往生業に廻向するのです。

念仏はひとり立ちさせて、すけささぬなり、との法然の句は有名ですが、これは往生義の本質と念仏に往生心決定迄であります。人は機縁機縁万差で狭量に失する事は仏ではない筈です。故石井教道先生も、弥陀はそんな狭量ではないと、よく教えられました。

わが心弥陀仏の本願に乘じ、決定往生を取るうえには他の善根に結縁助成せん事は雑業となるべからず、わが往生の助行となるべき也。(十二問答・勅伝四十五)

この世のいうりに念仏のほかに仏をも申し経を読み書き仏をつくらむは専修をさふる行にては候はず(勅伝二十五)

等に見る如く、人により、機縁により万差とし、唯だ往生義の本質のみは間違る事を許しません。そこが正確な三心具足の事なのです。ですから、寺院の古い等もそれを弄するに非ず、弥陀仏よりの頂戴物と考える時は当然許されることで、まして哲理的な周易を助行的に用いる事も、時と場合によって許されることでしょう。但し魔悪修善諸仏の通戒ですから、占的占人占者等に関し、よくよく弥陀仏に背かぬように注意すべきでしょう。笈法等は省略いたします。市販の書物は大方は学者等か易者系か術系かにわかれます。朝日中国古典の易などが一番中庸ではないでしょうか。



人生の最大のたのしみはなんといっても、お互いに「話す」ことによつて生じる喜怒哀楽ではないでしょうか。ちよつとしたことばから大きな事件が生じたり、誤解がとけたりすることなどがままございます。

私は最近、二つの話すといふことのありがたさを味わいました。その一つは、生後一年三カ月になる孫がようやくそれまでのことばとはいえないような奇声から、人真似に発す数々のことばがなんともいえないたのしみとなつていくことです。最初に覚えたのが犬です。縁先に寝ころぶ犬を見ては「ワンワン」というのですが、今では犬以外の猫や馬、テレビに出てくる動物を見ては「ワンワン」と呼

罪の功のこ

びはしゃいでおります。その外、口ずけていろいろなことばを覚え、日一日と数をふやしておりますが、毎日いろいろ教えるのが私の日課となっております。

X

他の一つは、数十年ぶりに再会した女学校の旧友と昔話しに花をさかせたのですが、この友とはちよつとした仲違いから誤解し合つたまま、別れ別れに生活して今日に至つていたのです。すでに遠い昔のこと故、お互いにその時分のことなど忘れかけていたのですがいろいろ話すうちに、共に気まづくなるような誤解だったのです。今は共に孫をもつ、たのしい毎日を過していることをよろこびあい

吉川 千佳子

ながらその場を別れました。『災い転じて福となる』。とは誠によいことばと思いますが私の場合このことばを地でいったような気分、壮快な心地がいたしました。

X

今日では寺へ行つてもあまり説教が聞けなくなりしましたが、私の檀那寺の和尚様は、『私の説教ではなく、時局放談だよ』

といつて、法事にいくとかならず、その時期に生じた種々な事件を例に取りあげ、その背後にある要因を説明しながら、要領よくその中にお念仏の話をし、知らずのうちに人々を自分の側に引き入れてしまします。

これはことばの文とでも申すのでしょうか、まことに巧みなものです。しかし、これとして一歩方法方便をまちがえば誤解を生じ、にくまれる遠因ともなつてしまいます。けれども私はこの和尚様の話し方には大変興味を覚えるのです。いつも最後に共に唱える、

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……

の十遍のお念仏の響きが心良いからです。

和訳三部経

無量寿経(7)



浄土の快樂と光明

村瀬 秀雄

一、自然快樂の音をきく

釈尊は阿難に説法を続けた。

宝池の岸辺には栴檀樹が生い茂り、花や葉が垂り下り、香木の香りが一面に薫りわたっている。池の中には青蓮華、紅蓮華、黄蓮華、白蓮華が美しく咲き、いずれも色とりどりに輝いて、美しい光りが水上をくまなく照している。

もし人々が宝池に入つて、足まで浸りたいと思えば、水は自然に足まで被い、また膝まで浸りたいと思えば、水は自然に膝まで被う。このように水は人々の欲する通りに、あるいは腰まで、あるいは頸まで自然に被う。更にまた人々が水を浴びたいと思えば、水は自然に全身に濯ぐ。そして人々がこれでよいと思えば、水はもとの通りとなる。

水はおのずから暖冷が調和し、人々が水に浸ると思うままに智慧が開け、身体は悦び満ち、煩惱が消えてなくなる。水は清く澄んで、どのように深い所でも底の宝沙が照り輝いてみえるから、水はあつても形なきが如くである。

水面には小波がたち、緩急よろしくめぐり

めぐつて、次第に流れてゆく。この小波は無量の妙音をあげているが、この自然の妙音を聞く人々の欲する所に従つて、妙音が妙声となつて聞える。この妙声はあるいは仏、法、僧を説く声となり、あるいは寂靜、空無我、大慈悲、波羅蜜を説く声となり、あるいは十力無畏不共法²、六神通、無所作、不起滅、無生忍、甘露灌頂⁵その他さまざまな妙法を説く声となつて聞かれる。従つてこれらの声を聞いた人々は無量の歡喜に浸る。

人々はこの妙音を聞くことによつて、欲望を離れて清淨となり、寂滅眞実の道理にしたがつて、三宝、十力、無畏、不共法の法を悟り、神通力、菩薩、声聞の道に順応することができぬ。

このように浄土には地獄、餓鬼、畜生の苦しみという言葉すら聞くことがなく、浄土にあるものはただ自然快樂の音のみである。こうした理由によつて、この国を安樂国と名づけるのである。

註

1 波羅蜜は到彼岸と訳されるが、ここでは布施、持戒、忍辱、精進、智慧、禪定

の六波羅蜜のこと。

2 十力は仏が持つている勝れた十の智慧の力。無畏は仏が大衆に法を説くのに少しも畏れるところがないこと。不共法は他にはない独特の法のこと、仏には十八の勝れた智慧がある。

3 無所作は平等の理をさとって、作すべき所がないということ。

4 不起滅は平等の理をさとって、起すべき善も、滅すべき悪もないこと。

5 甘露灌頂は天の甘水を頭に灌ぐということであるが、このことは将来必ず仏となることを約束されたことになる。

二、浄土快樂

阿難よ。

浄土に往生した者は、いずれも清浄な身体をもち、妙音を口にし、神通力をもつようになる。そして住むべき宮殿、身につける衣服その他食べ物、飲みもの、香料等すべて必要なものはみな自然に備わっている。

もし人々が食事をしようと思えば、百味の飲食が盛られた七宝の食器が自然に現われる。しかしこのような食物が人々の目の前に

置かれても、誰もこれを食べないのである。ただ食物の色を見たり、香りを嗅いだりすることによって、ここに食物があると思うだけで自然に満足する。

浄土の人々は身も心も柔軟であるから、少しの執着がなく、すべて用が終れば自然に目の前から消え去り、必要と思う時には再び自然に現われる。このように浄土は清浄であり安穩であり、微妙な快樂だけがあり、人々はすべて常住不変の悟りの世界に達することができる。

また浄土にいる声聞と菩薩と天人は、同じくみな高明な智慧を持ち、熟達した神通力をもち、形や姿も全く同じである。ただ地上世界になぞらえて区別をしているにすぎない。いずれも同じく顔姿が端正で、容色は世を超えて勝れ、神とも人ともいいようがない程である。これらはみな自然虚無の身であり、無極の体を受けている」

註

1 神通力は何事も自由自在にすることができる力のこと。

2 百味の飲食は多くの種類の好味をもつ

食物ということで、多くの珍味のこと。

3 自然虚無の身は、実体がないという空の理を自然に身に現わしているというので悟りの世界に入っていること。

4 無極の体は、円満に極まりなく生きてゆくすがたのこと、善美をつくした浄土の生活のこと。

三、乞食のたとえ

釈尊は乞食のたとえをもって、阿難にたずねた。

「たとえは貧窮の乞食を帝王の傍に立たせたとして、その姿や形が比較する相手となるであらうか」

阿難は答えた。

「かりに乞食が帝王の傍にいたとしても、乞食はやせ衰え、卑しく、醜惡な姿をしているから帝王とはとうてい比較にならない。乞食の衣服は身体をつつむに十分でなく、食物は僅かに命を支えるだけしかなく、餓えと寒さに困苦して、人間らしい情理を殆んど失いかけている。

乞食は前世で善根を積もうとしなかった。財産を蓄えても施しをしようとせず、富有で

あつても益々物惜しみをし、しかも利益を追つてあくまで貪り求めた。あえて善を修めず、かえつて惡を犯して罪を積み重ねていた。そして一生を終つてみると、財宝は消散し、苦心して財産を集めたことが逆に憂惱のたねとなり、自分の利益に少しもならずして全部他人の所有に歸する。わが身のために頼むべき善根がなく、力となるべき功德がない死んだ後には地獄、餓鬼、畜生の何れかに落ちて長く苦しむ。かりに罪の償いをすませて人間に生れたとしても、愚かで卑しい人間となるにすぎない。

他方、帝王が人々から尊ばれるわけは、前世で徳を積んだからである。慈悲深く施してひろく人々を救ひ、仁愛に富み、信義を尊び善を修して人と争ふことがなかった。そして一生を終れば天上に生れ、福業を受ける。人間に生れてくれば、善根の余度によつて王家に生れ、尊貴の身分となり、儀容端正にして人々から自然に敬せられる。衣服と食物は思ひのままに得られる。これらはみな前世の福徳によるものである。

釈尊は阿難にいった。

「汝のいうことは正しい。しかし帝王が人中にあつて尊く、姿形が端正であるにしても、これを転輪聖王と比較すれば、帝王の方がはるかに卑しく劣つてゐる。また転輪聖王の姿は天下第一といわれているが、これは忉利天王と比較すれば、転輪聖王の方が万億倍も醜惡である。更にまた忉利天王を第六天王と比較すれば、忉利天王の方が百千億倍も劣つてゐる。ところが第六天王を無量寿仏の淨土にいる菩薩、声聞と比較すれば、第六天王の方が百千万億倍も劣つていて、とうてい比較することができない。」

註

- 1 転輪聖王は一世界を統領し、輪宝を転じて一切を威服する。
- 2 忉利天王は帝釈天のことで、仏法に歸依する人々を守護する。
- 3 第六天王は他化自在天のことで、この

天の一日は人間の千六百年にあたる。

四、淨土の有様

無量寿仏の淨土にいる人々は結構な衣服と飲食をもち、華と香と瓔珞と天蓋で飾られ、微妙な音楽を聞きながら宮殿樓閣に住んでい

る。それには高下大小と様々な形があるが、いずれも程よくつくられ、一宝、二宝または多宝からできている。もし人々がどれかについて欲しいと思えば、いつでもすぐ手に入れることができる。

大地には多宝からなる敷物がしかれ、人々はみなその上を歩む。淨土全体に無量の宝でできている網がはられ、この網は金糸でできていて、真珠その他百千の宝が通されている。四面に宝鈴がたれ下り、これらの珍宝がそれぞれ光り輝いて、言語に絶する美しさを呈している。

自然の徳風がゆるやかに吹き、寒くなり暑くなく、温涼柔軟であつて強くなく弱くなく程よく網や宝樹の間を吹き抜けてゆく。その時に微妙な法音を発し、また万種の温雅な徳香を薫じさせてゐる。この妙音を聞く者は自然に煩惱が消え去り、身に風があたればすべて快樂を得ることが出来る。これをたとえていえば、比丘が妄想を滅し尽した状態と同じことになる。

またこの風は宝樹の花を吹き散じて、大地に美しく積らせる。花の色つやは柔かく輝き

花の香りは強く芳しい。人々がその上を歩むと花の層は十種ばかり落ち凹み、足をあげるともと復する。一度踏まれた花は、大地が自然に開いて、その中にかくれ、地上には何も残らず清らかとなる。時節がくると風は再び宝樹を吹き抜けて花を散ずる。このように一日に六回くりかえされる。

また浄土には多宝の蓮華が遍満している。

一つ一つの蓮華に百千億の花弁があって、無量種類の色彩からなる光明を放っている。青色の花からは青色の光明を放ち、白色の花からは白色の光明を放っている。同じように黄色、朱、紫その他の花からは、それぞれ同じ色の光明を放っている。これらの光明は明るく輝き、日や月と同じように鮮明な輝きをもっている。そして一つ一つの花から三十六百千億の光りが放たれ、一つ一つの光りの中から三十六百千億の仏が現われている。これらの仏の身体はみな紫金色に輝き、妙なるお姿をしている。

更に一つ一つの仏は百千の光明を放ってあまねく十方世界の人々のために微妙の法を説いている。

このようにして多くの仏たちは、無量の人々を教化し、正しい仏道に導いている仏の説きたまう無量寿経の上巻を終る。

五、十八願の成就

仏、無量寿経を説きたまう 卷下

釈尊は阿難に説法を続けた。

「もし人が浄土に往生することができれば、

その人は必ず仏になれる。その理由は何かと

いえば、浄土には地獄、餓鬼、畜生の三惡道

におちる者がなく、常に仏果がすすんで中途

で止まるような者がいないからである。¹

十方世界の諸仏たちは、みな一緒に口を揃

えて無量寿仏が不可思議な功德をもっている

ことを称讃し給うている。²

あらゆる人々が無量寿仏の名号を聞いて、

心から信じ歡喜して乃至一念³、誠をこめて

浄土に往生したいと願うならば、必ず往生す

ることができて、再び他に転落することがな

い。ただし五逆罪を犯したものと正法を誹謗

したものはこの限りでない。⁴

註

1 これは第十一、住正定聚の願（仏道を

修行していて邪道におちることなく、未

來に必ず仏になるということ）が成就し

ていることを説いたものである。

2 これは第十七、諸仏稱揚の願（すべて

の仏が、無量寿仏の名号と浄土のことを

称讃するということ）が成就しているこ

と説いたものである。

3 乃至一念は平常の念仏から臨終の念仏

にいたるまで、すべてのお念仏というこ

とで、第十八願には乃至十念とあるが、

両者は同じことで、その意義は同じであ

る。

4 これは第十八願、念仏往生の願（真実

の心をもつて、深い信心を起し、浄土に

往生したいと念願し、南無阿彌陀仏と唱

えるならば必ず往生ができるということ

で、布施や持戒その他をもつて往生の行

とせず、称名念仏一行をもつて浄土往生

の行としたこと）が成就していることを

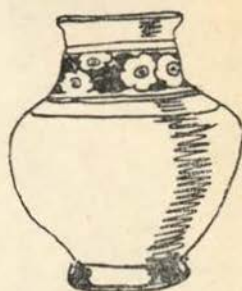
説いたものである。（終）

ながらくご購読いただきましたが、一応今

回をもちまして終らせていただきます。

誌上をかりてお礼申しあげます。

編 集 後 記



△暑さ寒さも彼岸まで▽夏の暑さを更に増すかのような蟬の鳴き声から、鈴虫・松虫・こうろぎ・くつわ虫等の心よい演奏にかわりようやく過しやすくなり、心身共に爽快な頃々です。

今月はご先祖の霊を弔う彼岸の月でもあります。この彼岸は仏教発祥の地インドでも、また中国でも見られない日本独自の仏教行事です。平安時代以前には春秋二季と言った行事とはなっていないかったようですが、時代の流れと共に、国民性を加味して、日常の生活と切り離せない行事となつて、今日に至つたものです。

したがいまして、その理念には今日生かされているという喜び感謝の念と共に、各自、日頃の言動を顧る反省の機会として、誠に願つてもない行事と考えるべきではないでしょうか。

☆

△灯下親しむ候▽夏の気だるさから開放され、机に向つても気の乗る頃となりました。これは私事になりますが、先月末、母校大正大学仏教学研究室の課外セミナーが信州の戸隠の中行なわれ、なつかしさのあまり特別参加しましたが、日頃のルーズな生活から、決められた日程によつてなされる輪談に、身も心も洗い流されたような気分を味わうことができました。

毎日、毎日を充実したものとして過ごせば、こんなにしあわせなことはございませす。しかし、現実には少しでも要領よくふるまおうとしてしまします。こうした意味からも僧侶共に有意義な人生をおくるために、一つの切り換え時でもある彼岸を本来の姿としてのまことの彼岸にしたいものです。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日
第三編郵便物認可

昭和四十三年八月二十五日 印刷

昭和四十三年九月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六
発行所 法然上人鎌倉会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一七番

宮林 昭彦 著

「極楽に生きる」

宗祖のご生涯を通して、現代に生きる私達に
指針を与える好書

定価二六〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

四版 村瀬 秀雄 著

浄土宗 檀信のおつとめ

訓読・註解を付したわかりやすい経本

定価一〇〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

◇ 浄土トラクト ◇

- | | | |
|--------------|--------|----------|
| 四季の寺まいり (再版) | 安居香山 著 | 価30・〒15 |
| 浄土宗のおしえ (四版) | 宮林昭彦 著 | 価30・〒15 |
| 諸仏の戒め | 村瀬秀雄 著 | 価5・〒15 |
| 一枚起請文をめぐって | 村瀬秀雄 著 | 価120・〒35 |
| 選択集私解 | 竹中信常 著 | 価120・〒35 |
| ものいう石 | 竹中信常 著 | 価150・〒45 |

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和四十三年八月二十五日印刷

(毎月一回一日発行)
昭和四十三年九月一日発行

浄土

第三十四卷

第九号

定価金六拾円(送料
六円)